

川越市鶴ヶ丘遺跡C区の石器群

田中英司

要約 川越市鶴ヶ丘遺跡の先土器時代資料については、報告書刊行後に必要な石器について実測図を作成した。その図の一部は砂川型式期を論じた拙稿のなかで使用したが、残る図については公表する機会を得なかった。今回、作成した実測図のすべてを提示して、その責を果たしたい。砂川型式石器群については県内でも類例が増加している。過去の資料ではあるが鶴ヶ丘遺跡に認められる特徴が当該期研究の貴重な事例となるだろう。

はじめに

鶴ヶ丘遺跡は武藏野台地の北東縁部と入間台地南端の合する、入間川の支流である小畦川の左岸にある。標高33m前後で、低地との比高差は約5mである。遺跡は川越市と鶴ヶ島市にまたがるA～Hまでの8区から成り、このうち先土器時代の資料が出土したC区は川越市側に位置する。1974年に発掘調査が行われ、1976年に調査報告書が刊行された(谷井1976)。出土資料は現在、県立博物館に収蔵されている。

筆者はかつて研究の必要性から、鶴ヶ丘遺跡の遺物整理を担当されていた当時の文化財保護課谷井彪氏の御配慮により、この石器群を実測させていただいた。作成した図の一部は「砂川型式期」を論じた拙稿で使用したが(田中1979・1984)、残る図の公表を痛感しながらも、その機会を逸していた。もとより出土した石器のすべてを実測したわけではなく、図そのものも20年ほど前の視点で図化した不十分なものである。しかし当事業団西井幸雄氏をはじめ若手の研究者による県内先土器時代資料の再集成の計画もあり、砂川型式の一角を埋めるものとしてここに掲載させていただくことにした。

1 ユニット1の石器群

報告書にも記載されているように、鶴ヶ丘遺跡C区の石器群は二種類に分けられる。ひとつは発掘区のもっとも標高の高い位置のローム層中から、一定のまとまりをもって出土した「ユニット1」と名づけられた資料である。そしてもうひとつが弥生時代以降の住居址覆土などに混在していた石器群である(谷井1976:p.113)。分析を行う上で出土状態から資料的に限定しうるものはこのユニット1のみである。なお、小稿では一部の石器についてこれまでの分類を変更したものもある。

ユニット1は総数64点でソフト・ローム層下半からハード・ローム層上半部にかけて、深度差20～25cmの幅で出土したとされている。構成する石器は大きくふたつの母岩からなっている。どちらもチャート製である(註1)。

報告書で「母岩1」とされたものは総数38点、全体が茶色がかった色調に、ところどころ半透明

の部分が縞状にまじる。残された自然面の状態から原石は円礫であったことがわかる。もうひとつが「母岩2」とされたもので全体に青みを帯びて、そのなかに黒い縞が入る。片理・節理が走り、残された自然面からすると原石は母岩1よりも大きい。

ナイフ形石器（第1図1～6）

1は180度方向の異なる剝離によって素材を剥ぎ、正面右側縁のみの加工でナイフ形石器に仕上げている。筆者分類の第1形態に属するものと判断したが、典型的な二側縁加工ではない。第1形態の中でも4類にあたり（田中1979：p.69）、本来基部に加工がほどこされて側刃縁を作り出すべきものが、素材面の屈曲をそのまま利用できたために、二次加工は背縁のみですんだものと考えられる。先端角は推定約35度で側刃角は約125度、両者の角度の和が直角にちかい「補角の関係」を保っている。砂川期第1形態のほぼ平均的な数値と言ってよい（田中1984：p.15）。4類は本遺跡からもう1点出土している。他にも砂川遺跡をはじめとして散見し、素材と調整加工との対応関係で成り立つナイフ形石器製作の特徴をよく示している。

2～6は第2形態のナイフ形石器である。全体に小形の例が多いなかで、2はやや大形に属する。素材は両説打面の石核によって剝離されている。頭部の加工ははじめ正面から裏面（主要剝離面）方向への加撃で剥片を割り、その後は逆に裏面から正面への二次加工がなされている。先端角は約55度である。右側縁下部の加工はプランティングではなく石核段階の調整痕であろう。3・4は同一母岩であり、どちらも下半を欠いている。3は頭部の一端に凹状のプランティングが施されている。正面に両説打面の存在を示す180度方向の異なる剝離痕がある。3はともかく4を第2形態にふくめるか、4類の第1形態とするかは意見が分かれるかもしれない。しかし3の先端角は約70度、4の先端角も65度と近似し、同一母岩であることからも第2形態のナイフ形石器と推定される。5・6もやはり同一母岩例であり、6が第2形態であることから5も同形態のナイフ形石器としたが、5の正面左に側刃角のような屈曲をもつために1のような第1形態4類のナイフ形石器の可能性もある。

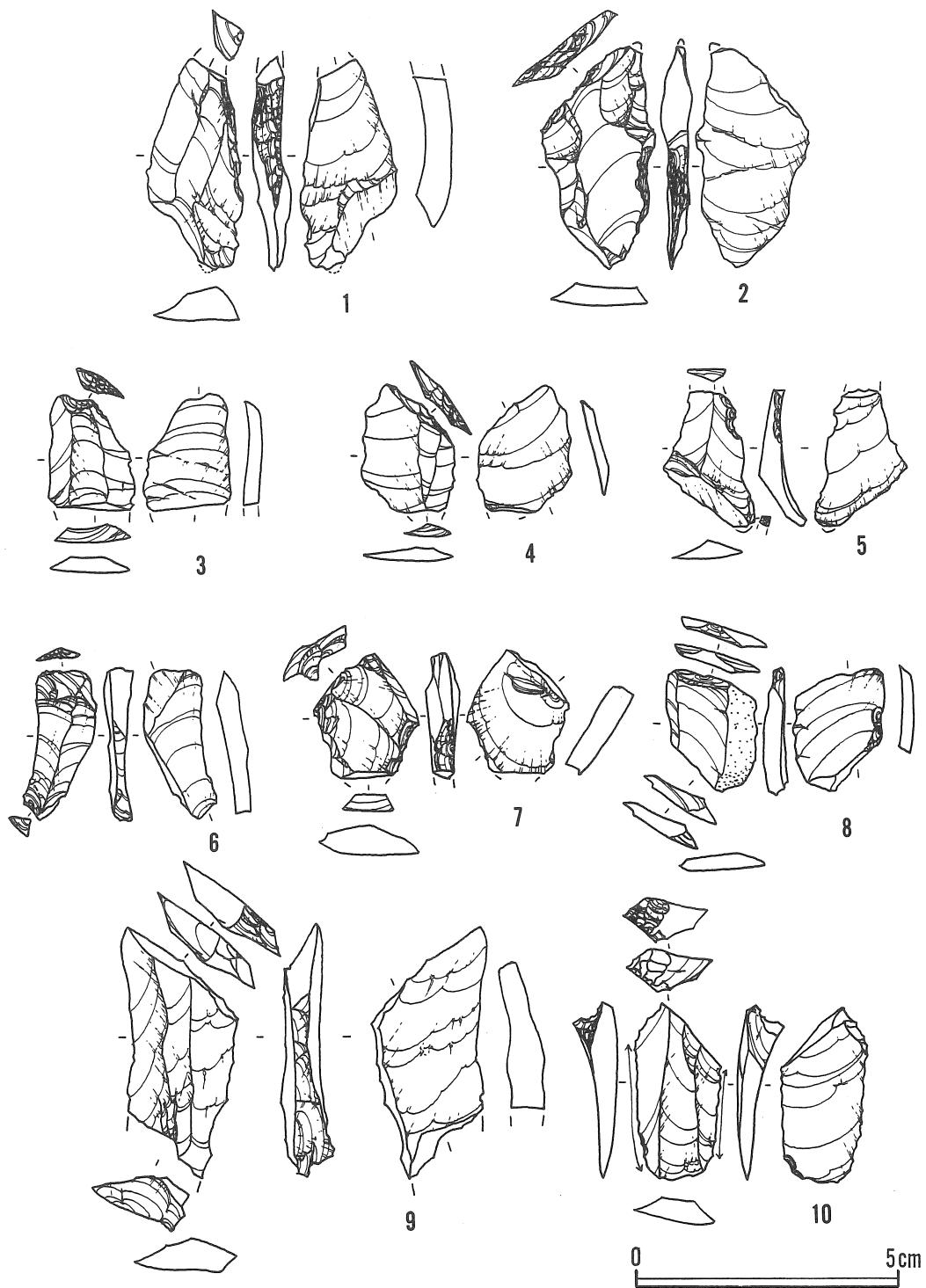
未製品（7～10）

ユニット1の石器群には比較的多数のナイフ形石器の未製品と思われるものをがまじっている。7は右側縁下部に加工が施されているが、左上部に素材の打面が残されている。下半を欠くことから、正面右側縁に第1形態の側刃縁を作り出したが、破損のために作業が停止したものだろうか。8・9は先端から背部周辺の加工の痕跡がある。特に両例ともに剥片を分割した後に細やかな調整加工を施したことがわかる。9の正面右側縁には剥片剝離の過程を想像させる調整痕が残る。10の正面右上には正面から裏面方向へ加工されている。これは砂川型式に特徴的な裏面基部への加工と推定される。全体の形状からして製品としての上下は図と逆になろう。

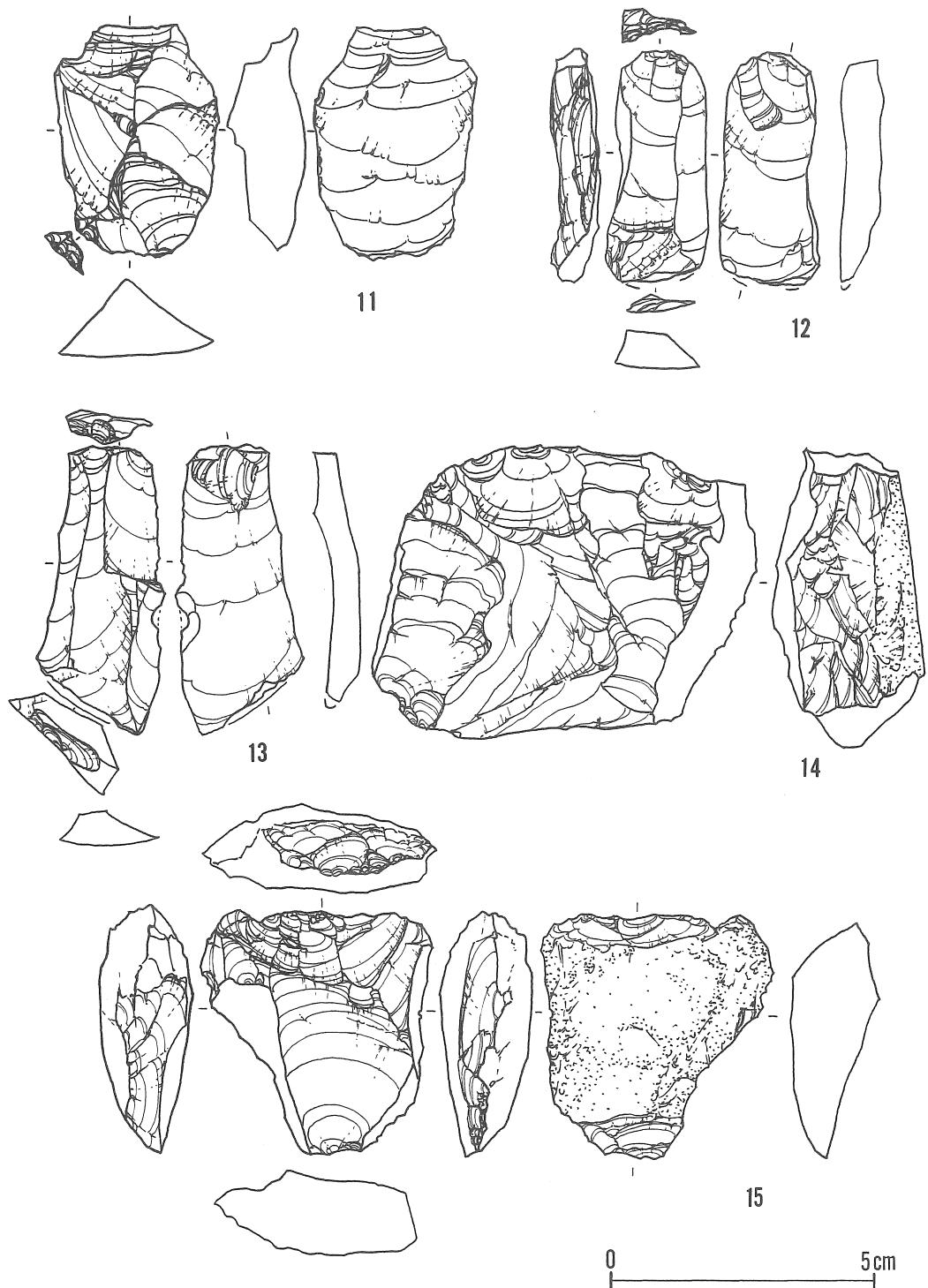
以上の特徴から7～10のいずれも、第1形態のナイフ形石器を目的とした未製品と考えられる。

搔器（第2図11）

搔器と思われるものが本ユニットから1点確認されている。ただ母岩は1・2と同じではない。正面に多方向からの剝離痕が残る、打面を欠いたやや幅広の剥片を素材としている。刃部は正面下端に小規模設けられている。



第1図 ユニット1の石器(1)



第2図 ユニット1の石器（2）

剝片 (12・13)

両例とも母岩 1 の縦長剝片であり、接合資料の一部を成す。ともに下端を欠くが、特に 13 には主要剝離面から正面にむかう加撃痕がある。これをナイフ形石器製作のための加工ととらえると、あるいはごく初期の未製品とすべきかもしれない。

石核 (14・15)

石核は 2 点含まれている。14 は母岩 2 で、後に述べるように 1 のナイフ形石器などが接合した。正面の剝離痕は上面から左側面・下面へと、石核を半周するように残されている。いずれも幅広のものである。15 は 14 と同じく両設打面で、剝離痕を見るとやはり幅広の剝片を剥いでいる。両例とも背面に自然面を大きく残している。

母岩 1 接合例 (第 3・4 図)

母岩 1 の 1 個体には 4 点の石器が接合した (第 3 図)。剝離作業は正面向って左から右へと、12・16→13→9 の順に行っている。12 と 9 には側面の調整痕が残るから、剝離作業はおよそ幅 4 cm、高さ 7 cm の範囲に集中している。打面調整は 12・13 に細やかに施されている。得られた剝片は中央付近に 2 条の稜線を持ち、長さ 5~6 cm、幅 2 cm 前後のきわめて規格的である。接合はしなかったが同一母岩製の 7・8 についても、その形状から 12 以下の剝片と相前後して剝離されたものと推定される。

母岩 1 のもうひとつの個体にも 4 点が接合している (第 4 図)。打面付近への調整作業によって残されたもので、剝離は 17→18・19→20 の順に進められている。20 の正面には前個体とほぼ同じく、約 5 cm 幅の剝離作業面がある。背部に礫面が残されていることから、12 以下の個体よりも時間的に後続するのかもしれない。

母岩 2 接合例 (第 5 図)

母岩 2 では石核 (14) に 3 点の石器が接合した。この原材は縦横に石理が走り、整った縦長剝片を剥ぐことは本来むずかしかったかもしれない。剝離の順番は 1・21→22 であり、幅広の剝片を主に剥いた痕跡が残る。1 のような 4 類ナイフ形石器の素材と調整加工との対応関係が生まれる要因となっている。その他に非接合のナイフ形石器 (5・6) がある。

2 その他の石器

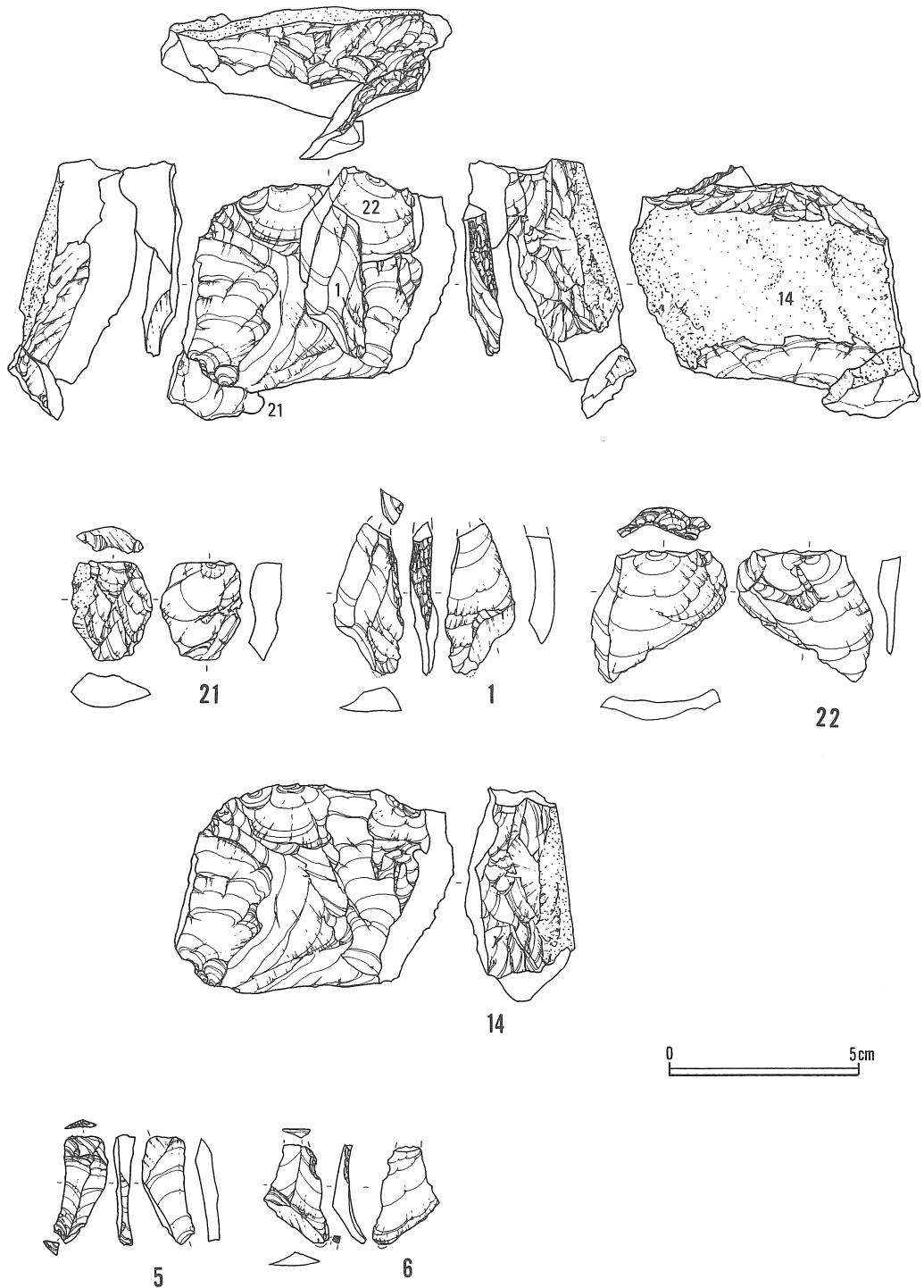
各住居址覆土中に混在していたものを一括した。実測した範囲ではユニット 1 の石器群と明らかに母岩を同じくするものはない。

尖頭器 (第 6 図 23・24)

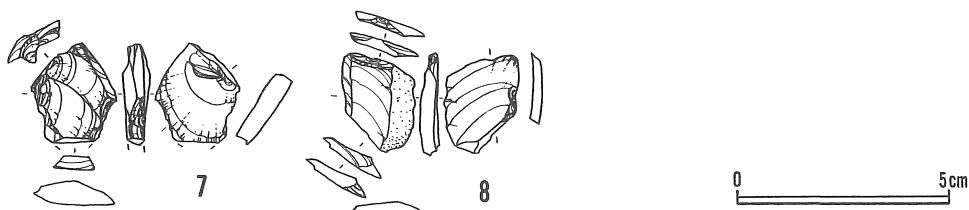
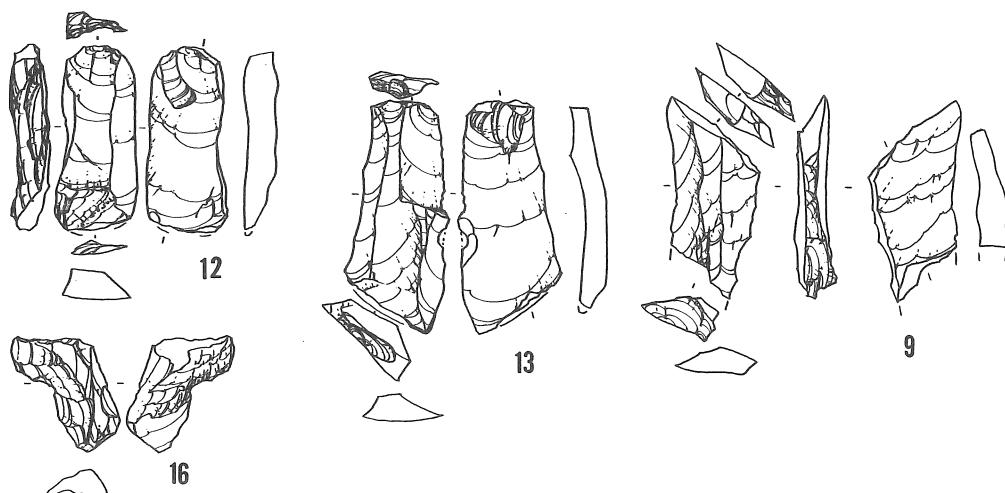
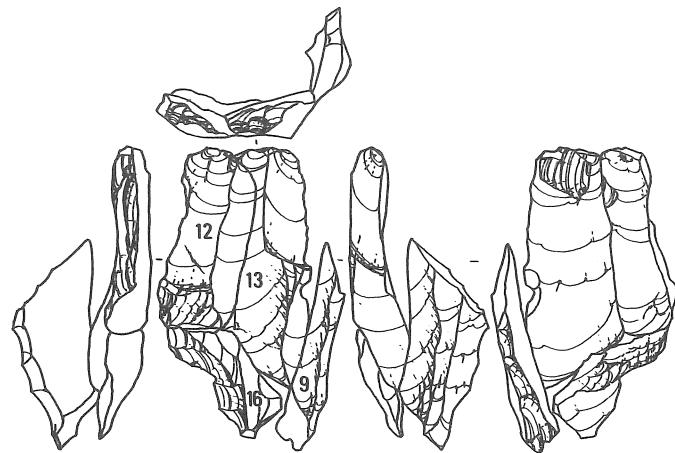
第 6 図 23・24 は両面加工の尖頭器である。23 は黒曜石製で、先端を欠くが月桂樹葉のよく整った形状をなしている。24 はやや小形のチャート製で、両面の頭部付近に素材面を残している。

ナイフ形石器 (25~32)

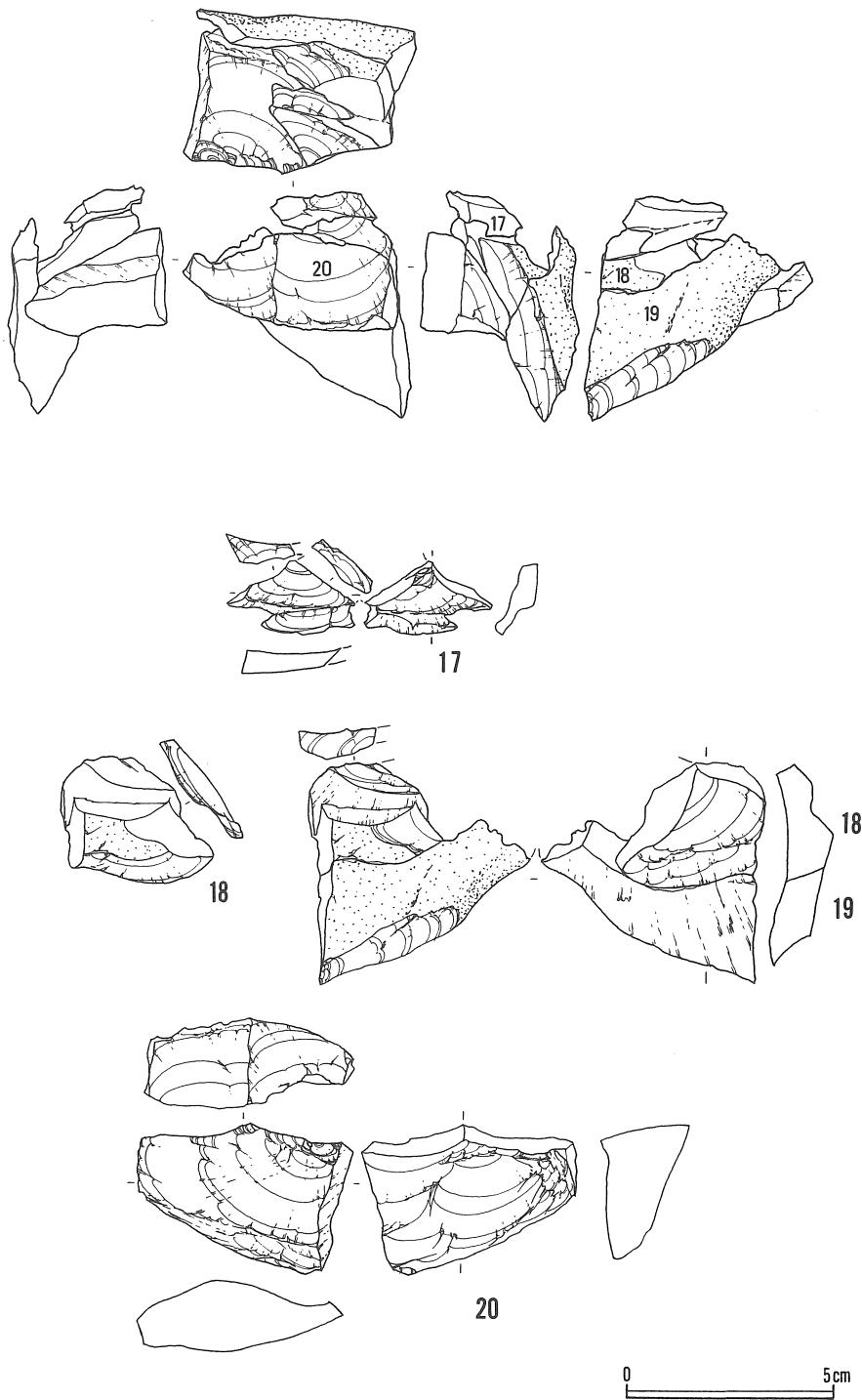
25~32 はナイフ形石器である。25~28 は第 1 形態、29・30 は第 2 形態と考えられる。27 は裏面方向への基部加工がなされている。28 は 4 類のナイフ形石器で側刃角は約 140 度である。29 は幅の広い剝片の打瘤付近に、凹状の二次加工を施して第 2 形態のナイフ形石器を作り出している。30 は頭部



第3図 母岩1の石器（1）



第4図 母岩1の石器（2）



第5図 母岩2の石器

の加工を第2形態の二次加工と判断したが、後にふれる33のように正面右側縁の直線部を削器として、頭部加工を搔器の刃部にして組み合わせた搔器かもしれない。31・32は未製品と考えられる。31は側刃縁にあたる部分にきわめて小規模の加工が施されているほかは、ほとんど素材を改変することなく利用している。あるいは未製品ではなく、剝片部そのものが第1形態にちかい完成品とも考えられる。32は同じく第1形態の未製品で、側刃縁にあたる部位が裏面基部の加工によって作り出されていることが注目される。刃部の向き、打面を上位に残している点でも母岩1の7に類似する。

搔器（33）

33は先刃式の搔器に正面右側縁を凹刃削器として組み合わせた特色のあるものである。凹刃削器は全国的に認められ、そのバラエティは砂川型式を特徴づけるものといってよい（田中1984）。さらにこうした「側凹刃端搔器」とでも称すべき複数の刃部を組み合わせた例は、東京都廻沢北18号ロック（世田谷区教育委員会他1981）・橋本遺跡第III文化層（相模原市橋本遺跡調査会1984）・長野県雪不知（藤森・中村1964）など、南関東から中部地方にかけての地域で類例がある。こうした搔・削器類を目安として、砂川型式内での地域性についてのべたことがある（田中1984：p. 12～13）。搔器類の類例は少ないが、いわゆる「小坂型」などの彫器とならんで、注意すべき砂川型式の構成要素といえる。

剝片（34・35）

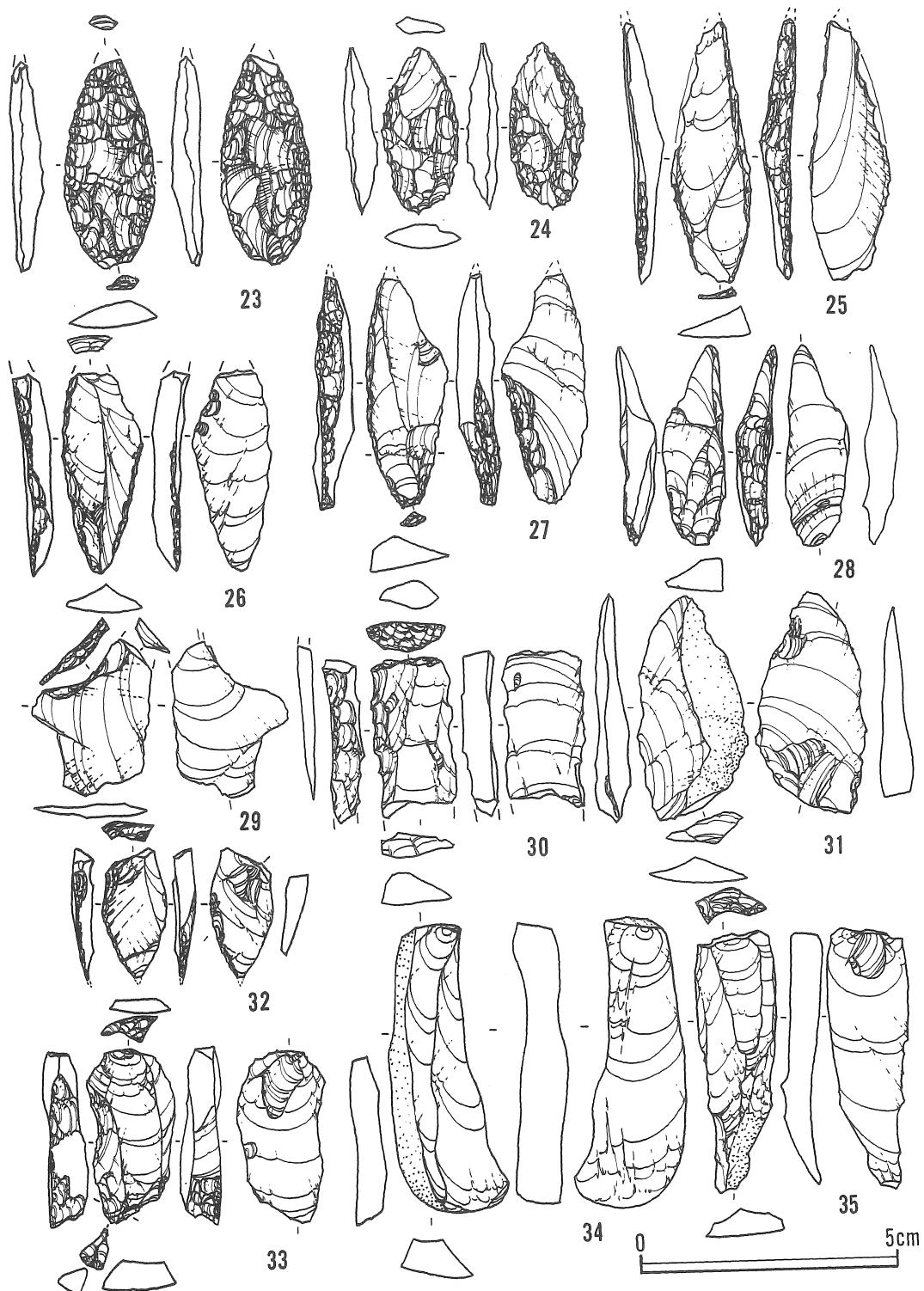
縦長剝片を2点図示した（34・35）。どちらも一部に自然面を残している。34はやや末広がり、35は逆に末端が尖る。どちらも刃縁に刃こぼれのような痕跡は顕著ではない。大きさの上からもナイフ形石器の素材として利用可能なものであろう。

以上の石器について、最後に計測値等を表1に示した。

結 語

鶴ヶ丘遺跡については拙稿以外にも、すでにいくつかの文献の中で触れられている。現在では県内においても狭山市西久保遺跡（栗岡・西井1995）をはじめ、飯能市屋渕遺跡（西井1996）など、砂川期の良好な石器群が暫時蓄積されてきている。こうした質量ともに充実した資料にくらべれば、鶴ヶ丘が僅少であることは否めない。しかし問われているのはその多寡ではなく、手にした資料に対する評価であろう。

砂川期を設定してすでに15年、西井氏による県内資料の集成は砂川期研究の歳月を感じさせるものである（西井1996）。データが充実し、石器型式研究に新たな材料が蓄積された。しかし懸念もある。そのひとつは砂川型式を武藏野台地を中心とした小地域に限定しようとする方向性である。ここで詳しく触れる余裕はないが、西井氏の分析で気になるのは、資料数の多い関東地方の石器群にとらわれすぎている点である。他地域のなかに武藏野台地と同じ特徴が認められた場合、それはどのように位置付けられるのか。共通する要素がありながらも、「ホライズンとして認識する」（西井1996：p. 60）場合と、「型式」として認定する場合のちがいは一体なんなのか。集成の領域からさらなる評価へと、今後の展開を期待したい。



第6図 その他の石器

砂川期の設定を題材として提示した筆者の「石器型式」については、既存の立場を固守するあまりか、当たらず障らずといった風潮がある。縄文以前の石器研究は戦後に開化した若い分野だが、畠ちがいの新奇な分析方法を受け入れることには驚くほど寛大だが、石器の見方についてはいささか保守的、あるいは教条主義的に過ぎるのではないか。

従来の石器研究ではそれが「型式」にしろ「形態」にしろ、結局は種々の分類名として冠せられている。どのような分類も「型式」・「形態」とよぶことが可能なのかもしれない。たとえばナイフ形石器のプランティングの「位置」が、ナイフ形石器の「型式」とよばれることがある。そしてその分類はたとえ同一母岩で接合したとしても、彫器の「型式」にはあてはまらない。広がりを欠いた従来の石器型式に対して筆者はそのひとつの範を、自国における巨大な実践例である土器型式に求めた（註2）。次元の異なる議論をくりかえすつもりはないが種々の問題はある、「型式」名を石器に先行して用いた「縄文土器型式」が単なる一遺物の分類を越えて、それが帰属する時間・文化・地域社会といった広汎な事象から、住居や墓や共伴遺物などの細部にいたるまでの包括した表徴としうることに学ぶべきではないか。

1996年6月27日脱稿

註

- (1) 報告書では頁岩とされているが（谷井1976：p. 86）、筆者の実見ではほとんどがチャートと思われる。ただしチャート以外の石材、頁岩をはじめ粘板岩と呼ばれているものなどについては研究者間でも名称の一致を見ていません。石質はなにかということ以上に、どのように呼ぶのかということが問題になっている。ここでの石質名はあくまで暫定的なものとして使用しておく。
- (2) 石器研究が土器研究を参考すべき点は多いが、無論すべてに準拠するわけではない。土器型式で注意すべきは、時に現象の多様性から型式が群雄割拠するようにつぎつぎと設定され、逆に小地域での閉鎖性に向う場合があることである。石器研究においても留意すべき点である。こうした傾向への批判から、既存の型式を見直そうとする気運がある（黒坂1989・1993）。また筆者は、縄文前期の石器を形作る要素を「意匠」ととらえて、土器型式と対峙させる試みも行っている（田中1995）。

引用・参考文献

- 栗岡 潤・西井幸雄 1995『西久保／金井上』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第156集
- 黒坂禎二 1989「羽状縄文系土器の文様構成(点描)-1」『(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第6号 p.1～28
- 黒坂禎二 1993「羽状縄文系土器の文様構成(点描)-2」『(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』第10号 p.45～82
- 相模原市橋本遺跡調査会 1984『橋本遺跡-先土器時代編-』
- 砂川遺跡調査団編 1974『埼玉県所沢市砂川先土器時代遺跡-第2次調査の記録-』
- 世田谷区教育委員会他 1981『廻沢北遺跡第5・6次調査概報』
- 田中英司 1979「武藏野台地II b期前半の石器群と砂川期の設定について」『神奈川考古』第7号 p.65～74
- 田中英司 1984「砂川型式期石器群の研究」『考古学雑誌』第69巻第4号 p.1～33
- 田中英司 1995「抉入意匠の石器文化」『物質文化』第59号 p.16～52
- 谷井 彪 1976「旧石器時代」『鶴ヶ丘』埼玉県遺跡発掘調査報告書第8集
- 戸沢充則 1968『埼玉県砂川遺跡の石器文化』『考古学集刊』第4巻第1号 p.1～42
- 西井幸雄 1996「入間・武藏野台地における砂川期の様相」『栗屋／屋渕／中台』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書

No.	石器名	石質	長さ(cm)	幅	厚さ	重量(g)	母岩	備考
1	ナイフ形石器	チャート	(4.0)	1.7	0.6	4.6	2	ユニット1
2	ナイフ形石器	チャート	(4.2)	2.2	0.6	3.9		ユニット1
3	ナイフ形石器	チャート	(2.1)	1.7	0.3	1.4		ユニット1
4	ナイフ形石器	チャート	(2.4)	1.8	0.3	1.3		ユニット1
5	ナイフ形石器	チャート	(2.5)	1.8	0.6	1.5	2	ユニット1
6	ナイフ形石器	チャート	2.8	1.2	0.5	1.5	2	ユニット1
7	未製品	チャート	2.3	2.0	0.6	3.0	1	ユニット1
8	未製品	チャート	2.3	1.9	0.4	2.0	1	ユニット1
9	未製品	チャート	(4.9)	2.5	0.8	6.8	1	ユニット1
10	未製品	チャート	3.2	1.8	0.7	2.7		ユニット1
11	搔器	チャート	4.4	3.1	1.5			ユニット1
12	剥片	チャート	(4.3)	1.9	0.8	7.5	1	ユニット1
13	剥片	チャート	(5.4)	2.3	0.9	10.6	1	ユニット1
14	石核	チャート	5.5	7.2	2.9	127.5	2	ユニット1
15	石核	チャート	4.5	4.3	1.7	34.5		ユニット1
16	剥片	チャート	3.1	2.0	0.6	3.4	1	ユニット1
17	剥片	チャート	1.8	3.1	0.6	2.4	1	ユニット1
18	剥片	チャート	3.0	3.8	1.1	10.9	1	ユニット1
19	剥片	チャート	5.0	5.8	1.0	13.3	1	ユニット1
20	剥片	チャート	3.5	5.1	2.2	32.0	1	ユニット1
21	剥片	チャート	2.6	2.1	0.8	5.7	2	ユニット1
22	剥片	チャート	3.5	3.8	0.5	5.4	2	ユニット1
23	尖頭器	黒曜石	(4.0)	1.8	0.6	3.6		
24	尖頭器	チャート	3.1	1.5	0.6	1.6		
25	ナイフ形石器	粘板岩	(5.0)	1.6	0.6	3.5		
26	ナイフ形石器	チャート	(3.9)	1.6	0.5	3.1		
27	ナイフ形石器	チャート	(4.4)	1.5	0.6	4.4		
28	ナイフ形石器	チャート	3.9	1.2	0.7	2.5		
29	ナイフ形石器	チャート	(3.0)	2.3	0.3	1.6		
30	ナイフ形石器	チャート	(3.1)	1.6	0.7	3.8		
31	ナイフ形石器	チャート	4.2	2.2	0.7	4.6		
32	未製品	チャート	(2.5)	1.3	0.4	1.3		
33	搔器	チャート	3.3	1.7	0.6	5.0		
34	剥片	粘板岩	5.5	2.0	1.0			
35	剥片	チャート	5.0	1.5	0.6			

表1 石器計測値